

「第四十二回城戸賞応募作品」

『ベランダの味』

たけしまかずえ
竹嶋和江

○あらすじ

デパートを定年退職した本田多恵子（60）の生き甲斐は、日中マンションのベランダで手料理とビールを楽しむこと。気ままな老後生活を送りながらも、独身で家族もなく、近所に顔見知りもないことに寂しさを感じずにいられない。そんな多恵子のもとに突然、隣の部屋に住む山崎希茶（4）が現れる。

母親にネグレクトされている希茶は満足な食事や衣服も与えてもらえず、ベランダで食事する多恵子を仕切り壁の隙間から覗いているところを多恵子に見つかる。

「お腹がすいているの？」と多恵子が隙間から差し入れた食事を無我夢中で食べる希茶。この日から二人の奇妙なベランダランチがスタートする。

子どもがいないため、子どもに抵抗感のある多恵子と、人に対する警戒心が強い希茶だが、ベランダでのランチによって次第に心を通わせるようになっていく。

ある日、希茶はベランダへ出てこなくなる。心配した多恵子が思いきって山崎家を訪ねると、ゴミだらけの家で一人うずくまる希茶の憐れな姿が。高熱を出し虫の息の希茶を多恵子は抱き上げて自宅へ連れ帰る。

元気になった希茶と多恵子の親子のような生活が始まる。服やおもちゃを買い与え、部屋も子ども用に模様替えし、母親気分を満喫する多恵子。

しかし、希茶を連れ出して3日後、帰ってきた母親が連れ戻しにやってくる。病気の娘を放置したことに反省する様子もない母親に、多恵子は希茶を渡すことを拒否したため、警察に誘拐容疑で連行されてしまう。

無事釈放されたものの、多恵子がマンションに戻ると、希茶は祖父母に引き取られ、会うことは出来なくなっていた……

2年半後、多恵子は小学校の給食室で調理師として働いている。春に入学してくる希茶にまた手料理を食べさせるために。

「登場人物」

本田多恵子(18)(60)定年退職し無職で独身

山崎希茶(4)多恵子の隣に住む少女

山崎世奈(27)希茶の母でシングルマザー

石黒智子(18)(60)多恵子の高校時代の親友

熊谷夏(62)多恵子と同じマンションの住人

田宮由美(63)多恵子と同じマンションの住人

澤田敏明(57)旭野小学校校長

荒木剛(53)多恵子の元職場の上司

山森美和(29)多恵子の元職場の部下

小室真里(25)多恵子の元職場の部下

村井希美(32)多恵子の元職場の部下

山根次郎(72)マンションの大家

吉倉豪(36)世奈の恋人

石黒優奈(2)智子の孫

久保田守(45)警察官

女性客(65) 新婚妻(22) 新婚夫(43)

老婦人 男の子(8) 女性店員(48)

給食室の女性スタッフ①②③

○マンション・503号室・台所

よくかき混ぜた黄金色の卵がフライパンへ勢いよく流し込まれ、グツグツと波打つ。
その上に素早くのせられるチーズとミートソース。
みごとな包丁さばきでアスパラと人参が切られ、ブクブクと沸騰した熱湯の鍋に入れられる。

○米屋デパート・食品売り場

中元商品が陳列する中、派手なワンピースを着た女性客(65)がヒステリックに山森美和(29)を怒鳴りつけている。

女性客「私はあなたに『極みシリーズ』を送ってと言ったはずよ！ それなのにあんな安物を間違えて送るなんて！ 恥ずかしくて仕方ないわ！」

美和「すみません：：でも、安物と言いましたも、たった200円の違いですけど？」
女性客「あなた！ 商品を間違えておきながら何なのその言い草！」

そこへ本田多恵子(59)が飛んでくる。
白髪交じりの髪を後ろできりと結び、整った顔立ちはクールで真面目な印象を与える。

多恵子「お客様、大変申し訳ございません！ 大切な贈り物をこちらの不注意で間違えてしまいました。先様にはこちらからもう一度商品を送らせて頂きます。お客様にも同じ商品をご用意いたしましたので、お詫びのお印としてお受け取り頂けないでしょうか？」

多恵子、女性客に大きな紙袋を差し出す。

女性客「あら、これ私に頂けるの？ じゃあ、今回のところは大き目に見ることにしようかしら。これからは気を付けてよ！」
多恵子「このようなことが二度とないように

細心の注意を払って参ります。誠に申し訳
ございませんでした」

多恵子、深々と頭を下げる。その後ろ
に立つ美和もしぶしぶ頭を下げる。
女性客、紙袋を手にルンルン気分で帰
っていく。

美和、顔を上げる。

美和「あの客、結局商品が欲しかっただけじ
やないですか？」

多恵子、ゆっくりと顔を上げると、前
を向いたまま落ち着いた口調で。

多恵子「山森さん」

美和「はい」

多恵子「あなたは新人でもないのに、どうし
てこんなミスをしたのですか？ ご注文頂
いた際にきちんと商品を確認しましたか？」

美和「……う！」

美和、急に口を手で押さえると、ダッ
とどこかへ走り去っていく。

多恵子「……」

多恵子、まるで気にしないかのように、
その場で商品の補充作業などを始める。
そこへ、薄い髪をオールバックにした
部長の荒木剛(53)、ヘラヘラしながら
やってくる。

荒木「本田課長、頼みますよー。若い子を
じめないで下さいよー」

多恵子、作業の手を止めずに答える。

多恵子「部長、私は別にいじめてなどいませ
んが」

荒木「美和ちゃん、妊娠しているのをご存知
ですよ？ これって立派なマタハラにな
るんですよー。少子化社会ですから働くマ
マは応援してあげないと！」

多恵子「そうですね……」

多恵子、笑顔を作りながらも下唇を軽
く噛む。

多恵子N「ご褒美だ」

○マンション・503号室・ベランダ

真夏の日差しが差し込む明るく広いベランダ。水色のテーブルクロスが翻り、木目のガーデンテーブルに掛けられる。その上に真っ白なレース編みのランチョンマットが敷かれ、フォークやナイフ、よく磨かれたビールグラスが整然と並べられる。

○米屋デパート・寝具売り場と会計レジ

商品を選ぶ新婚妻(22)と新婚夫(43)の接客をしている多恵子。

新婚妻、棚の最上段にあるマットを指さす。

新婚妻「あー、あのピンク可愛い！」

新婚夫「運命的！ 僕もあれがいいと思ったんだ！ 僕もピンク大好き！ すみませーん、あのピンクのマットを見せて下さーい」

多恵子「少々お待ちください」

多恵子、素早く脚立を持って来て駆け上り、棚からマットを懸命に引き出す。

多恵子「お客様、これで……」
とマットを手に振り返ると、新婚夫婦、もう別の棚の最上段にある枕を見ている。

新婚妻「ミッキーだ！ 可愛い！ これ欲しい！」

新婚夫「運命的！ 僕もあれがいいと思ったんだ！ 僕もミッキー大好き！」

多恵子「……」

そこへ、老婦人が商品を持ってくる。老婦人「すみません。これが欲しいのですが、レジがどこですか……」

多恵子「はい、ただ今ご案内します」

新婚夫「あのミッキーの枕、見せてもらえませうか？」

多恵子「かしこまりました。すぐに戻って参りますので少々お待ち頂けますか？」

老婦人を連れ、レジコーナーへ向かう多恵子、途中で談笑する荒木と小室真理(25)の前を通り掛かる。

多恵子「小室さん、寝具コーナーでお客様がお待ちなのでお願い出来ますか？」

真里、多恵子をチラリと見て面倒くさそうに答える。

真里「あ、はい。(荒木に)それでそれで？」

荒木「それでさ、僕は落ち込んでしまったわけ」

真里「アハツ、本当ですか？ 部長が？」

荒木「そりゃ僕だって落ち込むよー！ 昔は

これでも結構モテたからさー」

真里「違います！ 部長はモテた、じゃなく

て今でもモテますよ！」

荒木「本当に？ 真里ちゃんに言われると

嬉しいなー」

と話に夢中で一向に動こうとしない二人。

多恵子、気にならないかのように仕事を続ける。

多恵子「1080円になります。ありがとうございます」

会計が終わると素早く寝具売り場へと向かう。

多恵子「お客様、大変お待たせしました！」

○同・商品販売部（夜）

薄暗いフロア。壁時計は午後9時を過ぎ、社員が続々と帰っていく中、パソコン作業をしている多恵子。

村井希美（32）がやってくる。

希美「本田課長、明日は私、子どもの誕生日でお休みしますので、よろしくお願いします」

多恵子「明日？ 明日は確か物産展業者との

打ち合わせが入っているんじゃないか？」

希美「あ！ そうだった、忘れてた！ どう

しよう… 課長、明日いらっしゃいますよ

ね？」

多恵子「… 良かった。私が代わりに出てお

くわ」

希美「本当ですか？ やったー！ お願い

しまーす！ じゃあ、お先に失礼しまーす」

多恵子「お疲れ様……」

希美が去り、一人残されたフロアで、
多恵子「多恵子、黙々と作業を続ける。」

多恵子N「ご褒美だ」

○マンション・503号室・ベランダ

テーブル上に置かれた目が覚めるような黄色いオムレツ。周りを人参とアスパラが彩りを添えている。
プシュツと音を立てて開けられる缶ビール。白く柔らかな泡を立ててグラスへなみなみと注がれる。

○米屋デパート・商品販売部

美和・真里・希美「本田課長、お疲れ様でしたー！」

花束が多恵子に手渡される。

多恵子「ありがとう」

周りを囲む10数人の部員たちから、拍手が沸き起こる。

荒木、多恵子の隣で嬉々として挨拶する。

荒木「えー、本田課長は今日で定年退職されることになりました。38年間、この米屋デパートのために力を尽くしてくれた本田課長に心から感謝したいと思います。皆さん、今一度大きな拍手を！」

一同拍手。

荒木「いやー、本田課長がいなくなると僕も寂しくなりますよー。でも、ま、退職しても、ここは本田課長が人生の大半を過ごした場所、愛着もあるでしょうから、これからも気軽に遊びに来て下さい」

多恵子「行きません」

荒木「え？」

一同静まり返る。

多恵子「ここは職場です。遊ぶ場所じゃありませんから」

荒木、苦笑いする。

荒木「そんな意味で言ったわけではなくてで

すね、ちよくちよくプライベートで買い物
しに来て下さいという意味で……

多恵子「行きません」

荒木「え？」

荒木とその周りの部員たちの笑顔が固まる。

多恵子「創業63年。古びた店内は品揃えが悪
い上に値段が高い。私がいなくなれば当
然サービスの質も落ちるでしょうし、退職
した後、わざわざ買い物に来ようとは思
いません。デパートで買いたい物があれば、
通販で済ませます」

荒木「ほ、本田課長……」

多恵子「では、ごきげんよう。お世話になり
ました」

多恵子、にっこりと微笑み、啞然とす
る部員たちを残して颯爽と去っていく。

○マンション・503号室・ベランダ

けたたましく鳴く蟬の声。

大きめの白シャツにジーンズ、髪を下
ろし、すっかりリラックスした装いの
多恵子(GO)、椅子に座ってビールを飲
みながら、テーブル上のオムレツ越し
に見える、青空と隣の公園で生い茂る
木々の緑のコントラストをぼんやりと
眺めている。

夏風が吹いて、多恵子の長い銀色の髪
を優しく掻き上げる。

多恵子N「自然の風、自然光とも縁のなかつ
た人生よ、さようなら。これからは会社や
他人のことなんてどうでもいいわ、自分の
人生を自分のために生きましよう！」

多恵子、雲一つない澄み切った青空に
向けて、グラスを高らかに掲げ、ビー
ルと同色に輝く太陽と乾杯する。

○タイトル『ベランダの味』

○喫茶店

ふくよかな体でワンピースの花柄がよ
り大きく見える石黒智子(60)、店へ入
ってくる。

智子、周囲を見回し、窓際の席に多恵
子を見つけると、体を揺らしながらド
タドタと駆け寄ってくる。

智子「多恵子！」

多恵子「トモ！」

智子「久しぶり！　ちっとも変わってないわ
ね！」

多恵子「トモこそ！　全然変わってないわ！」
笑顔で見つめ合う二人、しばしフリー
ズ。

智子「……そんなわけがないわ」

多恵子「40年ぶりだものね。こんな皺々な

女子高生なんていないわ」

智子「こんなブヨブヨの女子高生もいないわ
よ。でも、さすが定年まで勤め上げた人は、
スタイルが良くて若く見えるわ」

多恵子「そう？　社会の冷たい荒波に揉まれ
て日本海の魚みたいに身が締まったのかし
ら？」

智子「羨ましいいわ。こっちは家庭のぬるま湯
に浸かりっぱなし。ふやけてブヨブヨよ」

多恵子「トモは元々ぼっちゃり体型だったで
しょ。そんなに変わってないわ」

智子「そう？　ありがとう。でも、ウチの主
人ったらね、ひどいのよ！　こないだ私が
玄関で転んだら何て言ったと思う？　『黒毛
和牛ならぬ、転げ和牛だな』なんて言うの
のよ！　人が痛い思いをしているのに……」

× × ×
食べ終えたケーキ皿と空っぽのティ
カップ。

多恵子、もう氷しか入っていないグラ
スをチビチビと飲んで上目使いで終
わらない智子の話を聞いている。

智子「私が孫に『おばあちゃん』じゃなくて、
『トモちゃん』って呼ばれているのを聞い
て主人ったら、何て言ったと思う？　『俺も

ヨッちゃんって呼ばれたい』ですって！
阿修羅像みたいな顔してよく言うと思わな
い？」

ケラケラと楽しそうに笑う智子に愛想
笑いをする多恵子。腕時計をチラリと
見ると、もう午後4時半を過ぎている。

智子「それでね、孫はお嫁ちゃんのお母さん
のことは何て呼んでいると思う？ 何とあ
つちは普通に『おばあちゃん』なのよ！ ど
うしてって聞いたら『おばあちゃん』っば
いからですって！ 私だけなのよ、名前で
呼ぶのは！ 子どもの感性って面白いわよ
ねー」

多恵子「……トモ、もうそろそろ、そのお孫
さんの保育園へお迎えに行かなきゃいけな
いんじゃない？」

智子「あらやだ、もうそんな時間？ ああ、
お迎えなんてもう嫌、面倒くさいわ。最近
の働く母親を応援する世の中の傾向は大い
に結構だけど、母親を社会に出すために犠
牲になる者がいること、わかっていてるのか
しらね。私は自分の子は自分で育てたのに、
孫も育てなきゃいけないなんておかしいと
思わない？ ああ、気楽な独り身のあなた
が羨ましいわ！」

多恵子「……（苦笑）」

智子「じゃあ、私は急ぐから先に帰るわね。
今日は会えて良かったわ。多恵子、ちっと
も変わっていないんだもの、高校時代に戻
った気分になったわ。退職して今は暇なん
でしょ？ これからは気軽に会いましょ
うね」

多恵子「そうね、そうしましょ」

智子「じゃあ、またね」

多恵子「ごきげんよう」

急いでトモと店を出ていく智子。
多恵子、その後姿を見送りながらつぶ
やく。

多恵子「トモ、あなたはすっかり変わったわ
……」

○回想く川原の土手(約40年前)

高校の帰り道、制服姿の多恵子(18)と智子(18)が並んで歩いている。

多恵子「もう3月。卒業したら別々の大学ね」
智子「私、いっぱい勉強して、絶対に一流商社に就職して、世界中を飛び回るキャリアウーマンになるわ！ これからの時代、女性も社会へ出て活躍しなくちゃ！ 多恵子の夢は？」

多恵子「私？ 私は：：毎日子どもたちが喜ぶ美味しいご飯を作ることかな」

智子「何をそれ？ へいぼーん！ それってお母さんになるってことでしょ。当たり前のことじゃない」

多恵子「そうか、そうよね。お母さんになるなんて当たり前前よね」

智子「そうよ。お母さんなんて誰でもなれるもの」

二人、顔を見合わせて笑う。

多恵子N「この平凡で当たり前だと思っていたことが、案外難しいのだと、大人になつてから知った」

○元のスーパー・ドリンク売り場

カートを押して買い物をしている多恵子。ビール棚の前で足を止める。

多恵子「数あるビールの中から『ご当地ビール新発売！』とポップに書かれた高級缶ビールを手に取る。値段を見ると、540円。

多恵子「まあ、高い：：でも、いいわ」

と、高級缶ビールを5、6本、カゴの中にポンポンと入れる。

多恵子N「結婚もせず、子どももない気ままな生活は楽だ」

○同・会計レジ

レジ待ちの行列に並ぶ多恵子。前には

赤ん坊を抱き、カートにも子どもを乗せた若い母親が立っている。多恵子、横目で母親と自分のカゴの中を見比べる。母親のカゴには山盛りの食品。そのほとんどのに『おつとめ品』の赤いシールがベタベタと貼られている。一方、多恵子のカゴにはビールとステーキ肉、牛乳、バターしか入っていない。多恵子N「買い物物の量は幸せの大きさに比例すると思う。『楽』と『楽しい』は同じ漢字を書くが別物だ。楽だからと言って毎日が楽しく幸せだとは限らない」母親、ぐずり出した赤ん坊をあやす。と、カートに乗った子どもが嫉妬して「ママー」と抱きついてくる。母親、二人の子どもの頭を撫でて幸せそうに微笑む。

○マンション・前(夕)

買い物袋をぶら提げた多恵子、マンションに入ろうとすると、中からジョギング姿の熊谷夏(62)が出てくる。

多恵子「笑顔で」こんにちは」

夏「驚いた顔で」え？ どちらさんでしたっけ？」

多恵子「私、503号室に住む本田です」

夏「ああ、どうも」

多恵子「いつも仕事で不在にしておりましたから、ご挨拶する機会もなくて……」

夏、多恵子の後ろから田宮由美(63)がやってくるのを見つめる。

夏「あ、田宮さん！」

由美「あら」

夏「さっきお宅の章ちゃん親子と会ったのよ。

お孫さん、大きくなったわねー！」

由美「まあ、どこで？」

話し込む二人に居場所をなくした多恵子、こっそりとその場から立ち去る。

○同・503号室・玄関(夕)

ドアが開いて多恵子、入ってくる。

多恵子「ただいま」

答える声はない。

多恵子 N「一人っきりの部屋」

○同・同・台所(夕)

多恵子、エプロンをつけ、買ってきたビールなどを冷蔵庫へ入れる。冷蔵庫の中に物はほとんど入っていない。

多恵子 N「一人だけの生活」

熱した鉄板にバターを落とし、1枚のステーキ肉を焼く。

空いた所へ茹でた一口大のポテトと人参を少量ずつ放り込む。

多恵子 N「一人分の食事」

○同・同・ベランダ(夕)

多恵子、既にテーブルセットされた所へ鉄板でジュウジュウと音を立てるステーキを運ぶ。

多恵子、ベランダの隅に並ぶ家庭菜園のプランターからクレソンを1本摘んでステーキの横に添えると、出来栄えに満足して微笑む。

多恵子「いただきます」

多恵子、ステーキをナイフで切れ分け、黙々と口へ運ぶ。

多恵子 N「一人ぼっちの食事……一人？」

誰かに見られている気がして手を止める多恵子。

多恵子、ふと横を向くと、隣の502号室との仕切り壁とマンションの外壁の間にできたわずか10センチほどの隙間から小さな顔が覗いている。

多恵子、小さな顔と目が合う。

多恵子「ヒッ！」

多恵子、思わずフオークを床へ落とす。小さな顔、慌てて姿を消す。バタバタ

と足音がし、ガラス戸の閉まる音。
多恵子、そのまま動けず放心状態。

多恵子「……」

○同・エントランス（夜）

多恵子、エレベーターから降りてくる。
住人の集合ポストの前へ行き、隣家を探す。

多恵子 N「現役時代は忙しく、近所付き合いは全くなく、隣に誰が住んでいるかも知らなかった」

503号室『本田多恵子』の隣、502号室には子どもが書いたような汚い字で『山崎世奈 希茶』とある。

多恵子「やまざき……きちや？」

○同・503号室・台所（朝）

ミキサーの中に小松菜、人参、リンゴ、バナナが次々と放り込まれ、スイッチが入れられる。
出来上がった緑色のスムージー、グラスへと注がれる。

○同・同・ベランダ（朝）

多恵子、スムージーを片手に部屋から出てくる。飲みながらしばらく静かに晴れわたった空を眺めているが、昨日、小さな顔が覗いていた隙間が気になる。
多恵子、スムージーをテーブルに置き、ベランダの手すりから身を乗り出して、こっそり隣の502号室を覗き見る。
隣家、閉め切った厚いカーテンで中の様子は全くわからない。

多恵子「……」

○同・エントランス（朝）

エレベーターの扉が開き、多恵子が出てくる。
出入口付近では夏と由美が立ち話をしている。

多恵子「あの」
夏「え？」
多恵子「おはようございます。ちよっとお尋ねしてよろしいですか？ 私の隣の502号室には小さなお子さんがいらっしやるんでしようか？」
夏「ああ、キティちゃんのこと？」
多恵子「キティちゃん？」
夏「『希望』の『希』に『お茶』って書いて『キティ』って読むのよ。『茶』を英語の『ティ』って読ませるなんてすごい名前でしょ？」
由美「全く最近の若い母親の感覚はわからないわよね。そういう名前、キラキラネームって言うのよ」
夏「さすが田宮さん！ 物知りねー」
多恵子「あの、希茶ちゃんは2、3歳くらいでしようか？」
夏「もっと大きいはずよ。去年ここに越してきた時は3歳って言っていたから」
由美「去年も3歳には見えなくらい、細くて小さくて、毎晩よく泣いていたわよね」
夏「最近あまり泣き声が聞こえなくなっただけど、前はうるさくて迷惑だったわね」
由美「母親が夜の商売をしていて昼間もどこかへ遊びに行くから放ったらかしだものね、可哀想に。こういうのをきつとネグレクトって言うのよ」
夏「田宮さん、さすが！ 難しい言葉をよくご存知ね！ やっぱりご主人が輸入家具のお店を経営されていると違うわ。ウチなんて和菓子屋だから横文字に弱くて！」
由美「あら、お宅のお嬢ちゃんだって、外語大出ているじゃない！」
夏「それを言うなら、お宅のお坊ちゃんは二人とも上智卒じゃない」
由美「あれは推薦で入ったから」
夏「え！ 推薦だったの？ 知らなかった！ あの高校、上智の推薦卒なんてあった？」
多恵子「……（どうでもいい）」

○同・503号室・台所

小麦粉と砂糖、卵などがボウルの中で激しくかき混ぜられる。熱したフライパンにかき混ぜた生地が注がれる。生地がぶつぶつしてきて裏返すとキツネ色にこんがり焼けている。積み上げられたパンケーキタワーの上にまた一枚載せられ、頂上にはバター。そのバターが溶け出し、頂上から白濁した黄金色の液体がキラキラと輝いて滴り落ちる。

○同・同・ベランダ

部屋から出てきた多恵子、既にテーブルセットされた中にパンケーキタワーを置く。

多恵子、家庭菜園のプランターからミントを2葉摘み取る。

バターが光るパンケーキの真ん中にミントの葉を飾ると、満足そうに微笑む多恵子。

多恵子「いただきます」

多恵子、手を合わせて黙々と食べ始める。

と、隣の502号室からガラス戸が開く音がする。

多恵子「来た！」

多恵子、気付かぬふりして食べ続ける。ペタペタと小さな足音が近づき、やがて止まる。

多恵子N「こっちを見ている！」

多恵子、横からの視線を感じながらも、構わずにパクパクと食べ続ける。

仕切り壁の隙間から覗く希茶の薄汚れた小さな顔。2つの大きな目だけが輝いている。

多恵子、突然食べる手を止め、前を向いたまま話し掛ける。

多恵子「お腹がすいているの？」

希茶「！（ビクツとする）」
多恵子「パンケーキ、食べる？ 美味しいわよ」

多恵子、パンケーキを1切れ、フォークに刺すと、立ち上がって希茶のほうへ行き、仕切り壁の前にしゃがみ込む。小さな隙間から伸びっ放しのボサボサの髪、黄ばんだワンピース1枚の希茶がおびえた顔でこちらを見ている。

多恵子「（微笑んで）どうぞ」

多恵子、柄のほうを希茶に向け、隙間からフォークを差し入れる。
が、希茶、フォークを受け取ろうとはせず、多恵子に向かって大きく口を開ける。

希茶「あーん」

多恵子「え？…あ、そう『あーん』したほうがいいのかしら」

多恵子、フォークを持ち替え、希茶の口にパンケーキを向けて差し込む。

多恵子「はい、あーん」

希茶、魚がエサに食らいつくようにバクツと一口で食べると、すぐに部屋へ向かって走っていく。
ピシャッとガラス戸の閉まる音。

多恵子「あらまあ…」

多恵子、呆気にとられるが、一瞬でパンケーキがなくなったフォークを見て思わず吹き出し、クスクスと笑う。

○専門書『増え続けるネグレクト』

『「ネグレクト」ネグレクトとは、世話が必要な子どもに対して、十分な食事や衣類を与えないなど育児を放棄すること。幼児虐待の一つ。親に虐待の自覚がない場合が多く、重大化し、子どもが死亡するケースもある』

○書店

老眼鏡をかけた多恵子、育児書コーナー

―で立ち読みしている。

多恵子「……（深刻な顔）」

多恵子、本を閉じて元の棚に戻す。

帰ろうとして、1冊の本に目が止まる。
本を手にとってレジへと向かう。

○スーパー・野菜売り場

多恵子、『子どもが喜ぶご飯レシピ』と書かれた本を開きつつカートを押して
買い物をしている。

多恵子「ひき肉は入れたし、次は、玉葱ね！

あ、あった、あった」

多恵子、山積みになっっている玉葱から
1個、カゴの中へ入れる。

また本で材料をチェックする。

多恵子「そして、じゃがいも、じゃがいも！
あった！」

と少し楽しそう。

○マンション・エントランス

夏と由美が立ち話しているところへ、
両手に買い物袋を提げた多恵子が帰っ
てくる。

多恵子「こんにちは」

夏「あら、お買い物？」

多恵子「ええ」

多恵子、暗証番号を押し、自動ドアを
開けて中へと入る。

自動ドアが閉まると同時に由美、声を
ひそめて、

由美「一人暮らしなのに、あんなに買って」

夏「あの人、毎日お買い物に出掛けているの

にね。今日は特売日でもないわよ」

由美「定年まで働いたんですよ、きつと厚生
年金をたっぷりもらっているのよ」

夏「いいご身分ね」

エレベーターに乗り込んだ多恵子、二
人に向かって笑顔で会釈。

夏と由美も笑顔を作る。

○同・503号室・台所

グツグツと煮込んでいるミートソース。フライパンの上、クマの形をしたハンバーグが裏返される。ゆでたてのじゃがいもがすり潰され、湯気を上げる。

多恵子「フフフフーン♪」

多恵子、『子どもが喜ぶご飯レシピ』を見ながら、手際よく料理を皿へ盛り付けていく。

○同・同・ベランダ

出来上がったランチの皿が2枚、テーブルに並ぶ。クマ型のハンバーグには鶉の卵で目、ケチャップで笑った口と頬が描かれ、ミートソーススパゲティとポテトサラダが添えられている。多恵子、ランチの出来栄を見て満足そうに微笑む。

多恵子「よし！」

多恵子、大きく息を吸うと、隣の502号室に向かってわざらしく叫ぶ。

多恵子「ご飯ができたわ！ あら、これは何の形かしら、もしかしてクマさん？ 食べるのがもつたいたくないくらいに可愛いわね！ でも、美味しそうだから食べちゃいましよ！ う！ いただきます！」

○同・502号室・ベランダ

ガラス戸が開き、裸足の足が一本、さらにもう一本現れ、そろりそろりと近付いてくる。

仕切り壁の隙間からハンバーグを美味しそうに頬張る多恵子の顔が見える。細い首がゴクリと動く。

○同・503号室・ベランダ

多恵子、ふと希茶の視線を感じ、仕切り壁の隙間を見る。

多恵子「いらっしやい。今日はクマちゃんの

ハンバーグよ。食べる？ ほら、希茶ちゃん
の分も作ったのよ」

多恵子、希茶の分のハンバーグランチ
を手に取って仕切り壁へ向かう。

多恵子、しゃがんで隙間を覗くと、も
う希茶が大きな口を開けて待っている。

希茶「あーん」

多恵子、その顔に思わず吹き出す。

多恵子「はいはい、『あーん』」

多恵子、ハンバーグを希茶の口に入れ
てやる。

希茶、飲み込むようにして一気に食べ、
またすぐに口を開ける。

希茶「あーん！」

多恵子「そんなに慌てないで。たくさん作っ
たから。スパゲティも美味しいわよ、どう
ぞ」

希茶、スパゲティも飲み込むように一
口で食べる。

多恵子「お代わりもあるのよ。いっぱい召し
上がれ」

食欲旺盛な希茶の食べっぷりが楽しく
て仕方のない多恵子、どんどん希茶に
食べさせる。

× × ×

多恵子「はい、これが最後」

多恵子、最後の一口を希茶に与える。

希茶、食べ終わると、すぐに背中を見せ、
部屋へ戻っていく。

多恵子、慌てて希茶の背中に向かって
叫ぶ。

多恵子「また食べにいらっしやいね！」
用意したランチは全てきれいになくな
っている。

○スーパー・野菜売り場

多恵子、老眼鏡でメモを見ながら、忙
しく動き回り、買い物カゴにどんどん
食品を入れていく。

○マンション・503号室・台所

多恵子、額から流れる汗を拭いつつ、カニ炒飯を中華鍋で炒め、隣のコンロでエビフライを揚げていく。

○同・同・ベランダ

多恵子、エビフライの尻尾をつけたクジラ型の巨大なカニ炒飯を手にベランダへ出てくる。

と、隣の家のガラス戸が開く音がして仕切り壁の隙間から希茶の顔が現れる。多恵子の顔がパツと明るくなる。

× × ×

カニ炒飯を膝にのせた多恵子、仕切り壁の隙間から希茶に「あーん」して食べさせている。夢中で食べ続ける希茶。

○スーパー・ドリンク売り場

多恵子、カートを止め、高級缶ビールを手にとってカゴへ入れようとして思いとどまる。

多恵子「……」

多恵子、缶ビールを元の場所に戻すと、代わりに紙パックのオレンジジュースとリンゴジュースをカゴの中へ入れる。

○マンション・503号室・台所

オーブン板に並ぶ、さまざまな動物の形をしたクッキー生地。

多恵子「フフフフィン♪」

多恵子、クッキー生地にゼリーやチョコでデコレーションしていく。

○同・同・ベランダ

多恵子「はい、これが最後よ」

仕切り壁の隙間から差し出されたスプーンにパクつく希茶。
希茶、食べ終わると、またすぐに帰ろうとする。

多恵子「ちよつと待って！」

希茶「？」

多恵子「今日はおやつも用意したのよ」

多恵子、テーブルから水玉模様の箱を持ってくる。

多恵子「何が入っているでしょうか？　じゃーん！」

多恵子、箱を開いて見せる。中にはたくさんの動物クッキー。

希茶「！（目を輝かせる）」

多恵子「どうぞ召し上がれ」

希茶、隙間から手を出し、箱のクッキーを驚掴みすると、ガツガツと夢中で食べる。が、途中で喉を詰まらせる。

希茶「ゴホッ！　ゴホッ！」

多恵子「まあ、慌てて食べるからよ。ジュースを飲んで」

多恵子、ジュースのストローを隙間に差し込む。

希茶、ストローをくわえ、すごい勢いで一滴残らず飲み干すと、多恵子を見てニカッと笑う。

多恵子、初めて見た希茶の笑顔に嬉しくなる。

多恵子「クッキーはまだあるわよ。いっぱい召し上がれ！」

○スーパー・菓子売り場

山盛りの食品を載せたカートを押して楽しそうに買い物をする多恵子。子どもが好きそうな菓子を選んでほんどんカゴへ入れていく。

○同・出入口

多恵子、両手に買い物袋をぶら提げ、帰ろうとした時、出入口口手前の一角に10人ほどの子どもたちが群がっているのを目にして足を止める。

多恵子「？」

よく見ると、新作のオモチャが展示販

売されている。その中の1つ、キティ人形に一人の男の子（8）が大きな声で話しかけている。

男の子「こんにちは！」

男の子、人形の胸のボタンを押す。

キティ人形「こんにちは！」

男の子「うわ、しゃべった！ えつと……セル、セル、タイムセル。お時間限定

のセルでございます！」

男の子、人形の胸のボタンを押す。

キティ人形「セル、セル、タイムセル。

お時間限定のセルでございます！」

それを聞いて周りの子どもたちがゲラゲラと大笑いする。

多恵子「……」

多恵子、キティ人形を見て思い出す。

○回想くマンション・503号室・ベランダ

仕切り壁の隙間から見えた希茶が着ている黄ばんだワンピース、ワンピーストにキティちゃんがプリントされている。

○元のスーパー・出入り口

多恵子、しゃべり続けるキティ人形をじっと見ている。

智子の声「多恵子じゃない！」

と、後ろから孫の優奈（2）を抱いた智子が現れる。

多恵子「トモ！」

智子「奇遇ね。どうしたの？ こんなところに立って。あの人形でも買うの？」

多恵子「まさか。通り掛かっただけよ。今、買い物が終わって帰ろうとしていたところなの。（優奈を見て）お孫さん？」

智子「そう、優奈っていうの。優奈、おばちゃんに抱っこしてもらいなさい」

優奈「はい」

智子、優奈を下ろす。

優奈、智子の手から離れてヨチヨチと

多恵子に向かっている。
多恵子の顔に緊張が走る。

多恵子「優奈ちゃん、いらっしやい……」
としゃがみ込んでぎこちなく両手を広げると、立ち上がってしまった。

多恵子「やっぱりダメ。ごめんなさい。私、子どもがいないから、触るのが怖い」
智子「そんな、首の座らない赤ん坊じゃないのよ」

多恵子「だって子どもって柔らかくて壊れそうだし、たまに予想できない反応するでしょ、それが怖くて……」

智子「変な人ね。大丈夫よ、年老いた私たちよりずっと頑丈よ。優奈、おいで」

優奈、智子の元へ戻っていく。

智子「こうやって子どもを抱くと気持ちいいわよ。幸せで満たされた気持ちになるんだから。それに小さな子どもの場合、まだ言葉で意思疎通はかれないから触れることによつて心を通わせることが出来るの」

多恵子「へえ……」

優奈「トモちゃん、もう行こうよー！」

智子「はいはい、もう行きましようね。ごめんね多恵子、せっかく会えたのに」

多恵子「ううん。また今度」

智子「連絡するわ」

智子、優奈と笑いながら楽しそうに店内へと消えていく。

○マンション・503号室・ベランダ

多恵子、仕切り壁を挟んで希茶に食事を与えている。少し元気のない表情の多恵子。

希茶「あーん」

多恵子「ちよっと待ってね」

多恵子、グラタンをすくおうとして、手が滑りスプーンを床へ落としてしま

多恵子「あ」

多恵子、慌ててスプーンを拾い上げる。

希茶、多恵子が持つスプーンを見て、

希茶「あーん！ あーん！」

多恵子「これは落としたからダメよ。新しいスプーンを持つてくるから待っていてね」

多恵子がテーブルへスプーンを取りに行っている間ずっとせがみ続ける希茶。

希茶「あーん！ あーん！ あーん！」

多恵子「……」

× × ×

多恵子「はい。これが最後」

多恵子、希茶にフォークに刺した桃を差し出す。

希茶、桃をくわえるやいなや、何も言わずにさっさと部屋へ帰っていく。

多恵子「……（空しく）」

多恵子、立ち上がり、黙々と食器を片づけ始める。

と、スズメが2羽、飛んできて落ちてくる食べ屑をついばみ出す。

多恵子、スズメをぼんやりと見つめる。

多恵子N「私がしているのは『餌付け』と同じなのかしら……」

○マンション前のゴミステーション（朝）

多恵子、両手に持っていたゴミ袋を2つ投げ捨てる。

多恵子、帰ろうとした時、ゴミを捨てにきた夏と由美に鉢合わせする。

多恵子「おはようございます」

夏「あら本田さん、最近ゴミの量、増えたんじゃないありません？」

多恵子「え？」

夏「（ニヤニヤして）以前はいつも1袋でしたよね？」

多恵子「あ、あの、最近よく友達が遊びに来るようになって」

夏「友達……それは楽しそう」

多恵子「ええ、まあ。ではお先に」

多恵子、そそくさとその場を立ち去る。
夏と由美、多恵子の後ろ姿を目で追いつながら、

由美「きつと男ね」

夏「えー！ あの人、60過ぎているのにな？」

由美「今時年齢なんて関係ないの。お金よ、お金。やっぱり厚生年金たっぷりもらっている人は違うのよ」

夏「いいご身分ね」

○マンション・5階エレベーター前（廊下）（朝）

多恵子、疲れた顔でエレベーターから降りてくると、502号室の前で露出度の高い派手な服にコバルトブルーのハイヒールを履いた山崎世奈（27）がサラリーマン風の男、吉倉豪（36）と抱き合って激しくキスしている姿が目に見え、飛び込んでくる。

多恵子「ま！」

吉倉「世奈を両手で引き離す。」

吉倉「俺、もう行くわ」

世奈「また来てくれるよね？」

吉倉「ああ」

世奈「いつ？ 今夜？ 明日？ その後？」

吉倉「そういうのは嫌いだって言っただろ？」

また絶対来るから。じゃ」

吉倉、呆然と突っ立っている多恵子の横を平然と通り過ぎていく。

世奈も多恵子の存在を気にもせず、吉倉に笑顔で手を振る。

世奈「よしりん、大好き！ 愛してる！ バイバイ！」

吉倉、軽く手を上げ、エレベーターの中へ消える。

吉倉が見えなくなると急に不機嫌な顔になる世奈、多恵子と目が合う。

多恵子「あ、あの……」

世奈、舌打ちし、家に入ってドアを力一杯閉める。

多恵子「……（啞然）」

○同・503号室・ベランダ

テーブル上に並んだカツサンド、シーザーサラダ、色とりどりのフルーツが入ったゼリー。

多恵子、502号室に向かって恐る恐る呼び掛ける。

多恵子「希茶ちゃん、ご飯よ。希茶ちゃん」
反応なし。

多恵子、不安になる。

多恵子「希茶ちゃん……」

と、ガラス戸が開く音がし、希茶が部屋から出てくるのが仕切り壁の隙間から見える。

多恵子「……(ホッとする)」

× × ×

多恵子、隙間からカツサンドを差し入れて希茶に食べさせている。

多恵子「ね、希茶ちゃん、ママは？」

希茶「(首を横に振る)」

多恵子「もう出かけたの？」

希茶「(頷く)」

多恵子「そう……今朝出て行った男の人は、パパ？」

希茶「(首を横に振る)」

多恵子「そう……あの男の人はいい人？」

希茶「(首を激しく横に振る)」

多恵子「……いじわるなの？」

希茶、食べるのをやめ、下を向いたまま沈黙する。

多恵子「……ママは、好き？」

希茶、再び顔を上げ、嬉しそうに大きく頷く。

多恵子「そう、それは良かったわ」

希茶、にっこり笑うと、また口を大きく「あーん」と開けて多恵子の差し出すカツサンドを食べ始める。

○喫茶店

多恵子と智子が向かい合って座って

る。

智子「こないだはごめんねー、せつかく会えたのに」

多恵子「ううん、お孫さんが一緒だったもの。仕方ないわ。優奈ちゃんだっけ？ 可愛いわね」

智子「そう、年を取って子どもの面倒をみるのは大変だけど、孫は可愛いわ」

多恵子「そうでしょうね」

多恵子、隣のテーブルで食事している母親と男の子を見る。

多恵子「女の子もいいけど、男の子も可愛いわね。優奈ちゃんと同じぐらかしら？」

智子「あの子はもう少し上。4歳くらいよ」

多恵子「よくわかるわね」

智子「子どもを育てた経験があれば、2歳と4歳の違いくらい誰だってわかるわよ」

多恵子「……（少し傷つく）」

智子「何か多恵子、変わったわね。そばにいる子どもが気になるなんて」

多恵子「え？」

智子「前に会った時も周りに子どもがいたのに全く関心をしめさなかったわ。何かあった？」

多恵子「何もいわよ。気のせいじゃない？」

智子「ううん、子どもを産んだ女はね、本能でわかるのよ。同じ子どもを産んだ仲間か、そうじゃないか。今日の多恵子、母親っぽい目をしている」

多恵子「そうかしら？ あれから、私、出産したりしたかしら？」

智子「そんなわけないじゃない」

二人、大笑いする。

智子「でも、多恵子はもともと子ども好きなんだし、子どもがいたほうがいいかもね」

多恵子「えー！ 今更どうするの？ もう私、産めないわよ」

智子「そりやそうよ。だから子連れの人と再婚するとか、養女を迎えるとか」

多恵子「養女？」

智子「そうよ、世の中には恵まれない子どもがたくさんいるのよ。今、日本の子どもは6人に1人が貧困家庭なんだから。ネグレクトが増えて言うんだっけ？ 育児放棄する親も増えてるみたいだしね」

多恵子「……」

智子「あなたは経済力もあるし、独り身で時間的余裕もあるし、可哀想な子どもを一人くらい引き取ってもいいんじゃない？」

多恵子「そんな簡単に。私は子どもを育てた経験もないし、体力的にももう限界だし。第一、私は子どもに触ることが出来ないのよ」

智子「あら、可哀想」

多恵子「え？」

智子、隣のテーブルを見ている。
母親、男の子に「あーん」と言って食べさせている。

多恵子「あれのどこが可哀想なの？」

智子「4歳だもの、一人で充分食べられるはずよ。それなのにさっきからずっと親が食べさせているわ」

多恵子「優しいお母さんに見えるけど」

智子「そうじゃないのよ。ちよっと待って」
智子、バッグからスマホを出していじり出す。

智子「このアプリ、知ってる？」

智子、スマホ画面を多恵子に見せる。

『子育てS A T E I』というタイトルの下には男の子と女の子が仲良く手を繋いで歩く動画。

多恵子「『子育て査定』？」

智子「そう！ 自分の子育てが正しいかどうか迷った時にはこれ！ 子育てを査定してアドバイスしてくれるのよ。子育ての仕方は時代によって随分と変わってきているの。子どもと同じように孫を育てていたら、お嫁ちゃんに『お義母さん、それは古いですよ』なんて言われたことがあってね。どうしたらいいかわからない時はこのアプリに

助けてもらっているのよ」

多恵子「へえー」

智子「ゲームみたいだけど、このアプリ、子育て専門家の意見を参考にして作られているから意外と的を射た評価をしてしつかりとアドバイスしてくれるのよ！　じゃあ、『あーん』して食べさせることが良いことかどうか、アプリに査定してもらおうわね。えっと、あの子は男の子で年齢は4歳。『あーん』して食べている」

智子、スマホ画面の『男の子』『4歳』にチェックを入れ、『現在の成育状況』との質問項目の下に『あーん』して食べている』と入力し、完了ボタンを押す。

智子「結果は……ほら、見て！」

スマホ画面、男の子が風見鶏に変身し、その下に『査定マイナス30』と書かれている。

智子「ほらね、やっぱりマイナス査定」

風見鶏、コミカルな動きをしながらしゃべり出す

風見鶏「時間がない、汚したら面倒くさいから『あーん』してるやろ？　親の都合で子育てするなや。このままやと将来は人の顔色をうかがって流されて生きていく風見鶏人間やぞ！　汚しても、食べるのが遅くても、自分の手で食べさせまっし！」

智子「だから、ああやって食べさせられている子どもは不幸だって言ったのよ」

多恵子、隣のテーブルを見ると、母親が「早く早く」と男の子を急かし、スプーンを無理矢理押し付けている。男の子の口はまだ食べ物でいっぱいなのに。

智子「母親の都合で育てられちゃ、子どもは可哀想よね」

多恵子「……」

○ マンション・503号室・ベランダ

仕切り壁の隙間から覗く大きな目。

多恵子、カレーを運んでくる。

希茶、カレーの香りに鼻をヒクヒクさせ、大きな口を開ける。

希茶「あーん！ あーん！ あーん！」

多恵子「はいはい、今あげますからね。ねえ、

希茶ちゃん。今日から食べる前に『いただきます』って言ってみましょうか」

希茶、多恵子の問いには答えず、大きな口を開ける。

希茶「あーん！ あーん！ あーん！」

多恵子「……」

多恵子、しぶしぶ仕切り壁の隙間からスプーンを差し入れると、希茶、すぐにはパクリと食べ、噛まずに飲み込む。

多恵子「希茶ちゃん、慌てずにゆっくり噛んで食べましょうね」

多恵子、また希茶の口にカレーを運ぶ。

希茶、また噛まずに飲み込む。

多恵子「……」

多恵子、ふとアプリの査定結果と智子の言葉を思い出す。

○回想く喫茶店

スマホ画面、しゃべる風見鶏。

風見鶏「時間がない、汚したら面倒くさいから『あーん』してるやろ？ 親の都合で子

育てするなや。このままやと将来は人の顔色をうかがって流されて生きていく風見鶏

人間やぞ！ 汚しても、食べるのが遅くても、自分の手で食べさせまっし！」

智子「母親の都合で育てられちゃ、子どもは可哀想よね」

○元のマンション・503号室・ベランダ

多恵子、希茶に食べさせる手を止める。

多恵子「ねえ、希茶ちゃん、ここじゃなくて、

おばちゃんのお家に来てご飯を食べない？

ちゃんと椅子に座ってゆっくり食べたほうが美味しいわよ」

希茶、激しく首を横に振る。

希茶「あーん！ あーん！ あーん！」

多恵子「じゃあ、スプーンを渡すから自分で食べてみましようか？」

希茶、怒ったように叫び出す。

希茶「あーん！ あーん！ あーん！ あーん！ あーん！ あーん！ あーん！」

多恵子「……」

多恵子、仕方なくまた希茶の口にカレーを運ぶ。

希茶、パクリと食べると、またすぐに飲み込む。

希茶「あーん！ あーん！」

多恵子「……」

仕方なくそのまま食べさせ続ける多恵子。

突然、希茶が吐き出す。

希茶「ペッ！ ペッ！」

多恵子「どうしたの？ 何か入っていた？」

多恵子、希茶の足元を見ると、人参が

一かけら転がっている。

多恵子「人参……苦手なの？ ダメよ、好き

嫌いしちゃ」

多恵子、人参の入ったカレーをすくって希茶の口に入れる。

希茶「ペッ！ ペッ！ ペッ！ ペッ！」

多恵子「……」

× × × ×

空になったカレー皿。希茶の足元には吐き出した人参のかけらが点々と転がっている。

多恵子、ガラス皿に一切れ残ったメロンをフォークで刺し、隙間から差し入

れる。

多恵子「はい、デザートはこれでおしまい。

食べ終わったら、『ご馳走様でした』って言

いましょ……」

希茶、素早くメロンをくわえると、何も言わずにさっさと部屋の中へ消えていく。

多恵子「……（ため息）」

× × ×

夜が更け、ベランダから見える公園は闇に包まれている。

多恵子、手すりにもたれ、ビールを飲みながらぼんやりとしている。

多恵子、隣の502号室を覗いてみる。

厚いカーテンで閉め切られた暗い部屋。

多恵子、502号室をうらめしそうに見てため息をつく。

多恵子「……！」

多恵子、何かをひらめいて急いで部屋の中へ入っていく。

○同・同・リビング（夜）

老眼鏡をかけた多恵子、スマホで『子育てS A T E I』のアプリをダウンロードする。アプリを開き、『女の子』、

『4歳』にチェックし、『挨拶をしない』、決まり事を守れない』と入力して完了ボタンを押す。

と、動画の女の子がオオカミ少女に変身してしゃべり出す。

オオカミ少女「このままだと、社会の秩序や常識を全く知らないオオカミ少女になるワ

ォーン！ 挨拶をしない、決まり事を守れない場合は無理にさせようとしちゃダメ！

出来るようになるまで待つ！ 周りの人間がお手本を見せてあげれば自然と身に付いてくるものだワォーン！」

多恵子「査定マイナス45。なるほど……」

多恵子、何度も大きく頷いた後、さらにスマホをいじる。

○同・同・台所

多恵子、アスパラと人参を薄切りの豚肉で巻き、フライパンで焼いていく。

時々スマホを見ながら調理するその顔はやる気に溢れ輝いている。

○同・同・ベランダ

多恵子、隣の502号室に向かって元
気よく叫ぶ。

多恵子「希茶ちゃん、ご飯ですよー！」

隣のガラス戸が開く音がした後、足音
が近づき、仕切り壁の隙間から大きな
目が覗く。

多恵子「今日は希茶ちゃんの大好きなお肉よ。
美味しいわよ」

多恵子、持って来た皿を一旦膝に乗せ、
両手を合わせる。

多恵子「いただきます」

希茶「……（見ているだけ）」

多恵子「はい、あーん」

希茶、「あーん」するが、多恵子が差し
出した肉巻きの中に人参が入っている
のを見つけて、固く口を閉じる。

多恵子「あら、食べないの？ そうか、希茶
ちゃん、人参苦手なものね。でもこの人参
には甘くなるように魔法をかけてあるの。
お肉と一緒に食べると美味しいわよ」

多恵子、肉巻きを1つ食べてみせる。

希茶「……（じっと見ている）」

多恵子「あ、美味しい！ ほっぺが落ちそう
だわ！ 希茶ちゃんが食べないなら私が食
べるわね」

多恵子、肉巻きをまた食べようとする。
と、希茶、大きな口を開ける。

希茶「あーん！ あーん！ あーん！」

多恵子、につこり微笑むと、肉巻きを
希茶の口の中へ入れる。

希茶、嫌そうな顔でモグモグと味わっ
た後、ゴクリと飲み込む。

希茶「……」

多恵子「……どうかしら？」

希茶、また口を大きく開ける。

希茶「あーん！ あーん！ あーん！」

多恵子「はいはい、お腹いっぱい食べてね」

と嬉しそうに微笑む多恵子。
テーブル上に置かれた多恵子のスマホ、

猫「我が儘そうな猫の動画がしゃべり出す。査定マイナス23。好き嫌いばかりしていと自己中心的な猫人間になるニャン。好き嫌いをなくすには調理法に一工夫するニヤ」
「
と言つて画面から消え去ると『野菜の肉巻き』のレシピが現れる。」

○スーパー・加工食品売り場

女性店員「丸徳食品から新発売のフラワーソーセージはいかがですかー！可愛くって美味しくって栄養たっぷり！食卓に花を咲かせましょう！」

親子連れが足を止める。

女性店員（48）、試食用のソーセージを差し出して、

女性店員「お一つどうぞー！このフラワーソーセージ、お子さんに大人気なんですよ。今ならお子さんにこのフラワー風船をプレゼントしちゃいます！」

女性店員、花の形をした大きな風船を見せる。

子どもに「買って！」とせがまれ、ソーセージをカゴに入れる親。

女性店員「ありがとうございます！はい、どうぞフラワー風船です！」

風船をもらつてキヤッキヤと喜ぶ子ども。

その様子を見ていた多恵子、遠慮がちにやってくる。

多恵子「そのソーセージ、私も下さい」

女性店員「ありがとうございます！お孫

さんにですか？」

多恵子「ええ、まあ……」

女性店員「では、これをどうぞ」

と多恵子にピンクの花の風船を手渡す。

○マンション・503号室・ベランダ

弱々しく鳴く蟬の声。

風が強く、薄いブルーの空をうろこ雲

が次々と流れていく。
テーブル上、フラワーソーセージとブ
ロツコリーで彩りを添えたオムソバ。
多恵子、仕切り壁を挟んで希茶にオム
ソバを食べさせられている。
夢中でパクパク食べる希茶。

多恵子「笑いなながら、
このオムソバ
の中には人参が入っているのよ。わからな
かったでしょう。もう希茶ちゃんには好き
嫌いがなくなつたわね、えらいわ！」

褒められて嬉しそうに笑う希茶。

希茶の笑顔に多恵子も微笑む。

多恵子「フオークに刺したフラワーソ
ーセージを見せて、

多恵子「ご覧なさい。このソーセージ、お花
の形をしているのよ。可愛いでしょ？ は
い、あーん」

希茶、ソーセージを食べる。と、目が
丸くなる。

多恵子「そんなに美味しい？ 大好物がまた
一つ増えたわね。あ、そうだったわ。ちよ
っと待っていてね」

多恵子、部屋に戻ってフラワー風船を
持ってくる。

多恵子「じゃーん！ 今日スーパーでもらっ
たのよ。ソーセージと同じ、お花の風船」
希茶「（目を輝かせて）わあ……」

多恵子「希茶ちゃんにあげるわ」
多恵子、手すりから手を伸ばして希茶
に風船を差し出す。

希茶、風船を受け取り、キャツキヤと
はしゃぐ。

多恵子「喜んでくれて良かったわ」
風船をポンポンと飛ばして遊ぶ希茶。
が、突然風が吹き希茶の手から風船を
奪う。

多恵子「あ！」
風船、手すりを飛び越え、公園の緑の
中へフワフワとゆっくり落ちていく。

○同・同・寝室（夜）

多恵子、ベッドの上で寝ながらスマホをいじっている。
スマホ画面、首輪をつけた犬の動画が尻尾を振っている。その下には、
『査定プラス35。将来は人の話を素直に聞ける従順な人間に』
と書かれている。

多恵子「やったわ！初めてのプラス査定！」
多恵子、両足をバタつかせて喜ぶ。

動画の犬、しゃべり出す。

犬「でも、これはあくまでエサを与えてくれる飼い主に対して尻尾を振って従う飼い犬と同レベルだワン。ワンダフルな親子関係にはほど遠イヌ」

多恵子、深いため息をつく。

と、外から雨音がする。

多恵子「あら雨？」

多恵子、窓を開けて暗い空から落ちてくる白い直線の雨を見上げる。

多恵子「随分と涼しくなってきたわね。ちょっと寒いくらい……もう秋ね」

× × ×

深夜、ベッドで熟睡中の多恵子。

隣の家の方からカツンカツンと足音がしてボタンとドアの閉まる音、バタバタと部屋中を歩き回る足音が聞こえる。
多恵子、布団に入ったまま、そつと目を開ける。

多恵子「？」

物を投げつけるような音、何かを探して喚き散らす女の声もかすかに聞こえてくる。

女の声「ない！　ない！　どこへいったの！　何でないの！」

やがてドアがボタンと閉まり、足音が遠ざかっていくと、静寂が戻ってくる。
多恵子、ホッとしてまた目を閉じる。

○同・同・ベランダ(朝)

多恵子、ガラス戸を開ける。雨は上がっているが、外気の冷たさに思わず身を縮める。

多恵子「まあ寒い……」

○同・エントランス(朝)

長袖の服を着た夏と由美、立ち話している。

夏「何だか急に寒くなって風邪引きそうよ」

由美「うちも慌てて長袖を出したわー」

そこへ、秋色の長袖ワンピースを着た

多恵子がエレベーターから降りてくる。

夏「あら、お出かけ？」

多恵子「ええ、寒くなったので服を買いに」

由美「今日は一段と素敵だからデートかと思
ったわ」

多恵子「フフフフ、まさか。米屋デパートへ

行くだけですよ」

夏「気を付けて」

多恵子「行ってきます」

多恵子、軽く会釈をして過ぎ去る。

夏、多恵子の背中を見送りながら、

夏「米屋デパートですって。あんな高級デパ

ートで服を買うなんて、やっぱりたくさん

厚生年金をもらっているのよ」

由美「ああいう子どものいない金持ち老人が

年金をいっぱいもらって楽しているから、

今の若い人が苦労するのよね」

夏「そうそう！」

悪口を言われているとも知らず、軽い
足取りで去っていく多恵子の後姿。

○米屋デパート・子ども服売り場

荒木と真里、楽しそうに談笑している。

荒木「最近本当にモテなくなってるね、いいな

と思っただけに連絡しても返事がないんだ」

真里「それは部長をじらして気持ちを確認かめ

ているだけです！ だって部長、見るから

にモテそうだもん！」

荒木「本当に？ 真里ちゃんに言われると嬉しいな。だから真里ちゃん、メールの返事をくれないんだ。」

突然後ろから声が掛かる。

多恵子の声「すみません」

荒木「はい、ただ今……！」

荒木、振り返ると、笑顔の多恵子が立っている。

荒木「うわ、本田課長！ いや、本田さん！」

多恵子「ご無沙汰しております。楽しそうにお話をしてる最中にごめんなさい」

荒木「ど、どうされたんですか？ うちにはもう来ないはずじゃ……」

多恵子「ええ、二度と来たくはなかったんだけど、そうも言っていられなくて」

多恵子、どこからか持ってきた女の子のマネキンをドンと二人の前に置く。

多恵子「このくらしい女の子の服が欲しいの。

通販じゃサイズや素材感がわからないし、他のデパートだと談笑して暇そうな店員さんなんていないから、こんな相談するのは気の毒でしょ？」

とにっこり微笑む。

○マンション・503号室・寝室

ベッドの上に長袖肌着、長袖ブラウス、長袖カーディガン、長ズボン、長袖ワンピースが2枚ずつ、ズラリと並ぶ。

多恵子、買ってきた子ども服を眺めている。

多恵子「ちよっとだけ買うつもりだったのに買い過ぎちゃったわ。女の子のお洋服って本当に可愛いわね。」

多恵子、花柄のワンピースを手に取り、希茶が着ているかのように動かしてみ

多恵子「嬉しい！ こんなお洋服、着てみたかったの！ ありがとう……なんて！ 女の子ですもの、きつとおしゃれしたいわよね。」

多恵子、他の服も手に取り、組み合わせ
て楽しむ。

○同・同・ベランダ

多恵子、鍋つかみで土鍋を持ってテ
ーブルへと運ぶ。

蓋を開けると、白い湯気とともにアツ
アツのおでんが現れる。

多恵子「寒くなったら、やっぱりこれよね！
希茶ちゃん、今日はあつたかいおでん
ですよー」

隣の502号室から反応はない。

多恵子「大好きなフラワーソーセイジも入れ
ましたよー、冷めないうちにいらっしや
いー！」

反応なし。

多恵子「希茶ちゃん？」

多恵子、手すりから身を乗り出し、隣
の家を覗き込む。
厚いカーテンで閉め切られたままの部
屋。

多恵子「……」

× × ×

テーブル上の冷めきったおでん。

辺りが薄暗くなっていく中、椅子に座
ったまま仕切り壁の隙間をじっと見続
けている多恵子。寒さにブルブルと震え
る。

多恵子「希茶、ちゃん……」

○ベランダで待ち続ける多恵子

テーブルに並んだビーフシチュー、ガ
ーリックトースト、サラダ、プリンな
どのご馳走。

多恵子、テーブルを持ち上げて運ぶ。

多恵子「よいっしょ、よいっしょ……ここか
な？」

多恵子、ご馳走が仕切り壁の隙間から
見えやすい位置までテーブルを移動し、
隣の家の反応をうかがう。

多恵子「うん、いい匂い！ よし！」
匂いが隣へいくように懸命にバタバタと団扇で扇ぐ。

多恵子「ゲホッ！ ゲホッ！」
が、風で煙が逆流し、むせ返る多恵子。

× × ×
× × ×
夜、手すりから何度も身を乗り出して真っ暗な隣の家を覗く多恵子。
× × ×
夕暮れ。仕切り壁の前にしゃがみ込み、伸びきって冷たくなった鍋焼きうどんを膝にのせたまま、壁の隙間を悲しげに見つめる多恵子。
やがて立ち上がると部屋の中へ入っていく。

○マンション・503号室・リビング（夕）

部屋に戻ってきた多恵子、壁にそっと耳をあててみる。

多恵子「……（何も聞こえない）」

多恵子、がっかりして壁に寄りかかったままズルズルと座り込む。
多恵子、顔を上げると、買ったばかりの子ども服がハンガーに掛けられて並んでいるのが目に入る。
多恵子の目から涙がこぼれ落ちる。

○同・101号室（夏の家）・前（夕）

チャイムの音。

夏の声「はい！」

ドアを開けて、割烹着をつけた夏が顔を出す。

夏「あら」

外には多恵子が立っている。

多恵子「あの、お忙しい時間にすみません。私の隣の山崎さんなんです、最近お見かけしないのでお引越してもされたのでしょうか？」

夏「山崎さん？ ああ、あの母子家庭の。大
家さんが家賃滞納して困っているって言っ
ていたけど、まだ出て行っていないはずよ。
水商売をしている人ってその辺ふてぶてし
いから」

多恵子「では、まだいらっしゃるのですね」
夏「住んでいるわよ。ウチは1階でしょ、あ
の人が帰ってくると、ハイヒールの音がカ
ツンカツンと聞こえてくるのよ。いつも深
夜にね。迷惑な話でしょ……でも、昨日、
一昨日、その前の日も聞いていないわね」
多恵子「それでは3日前から家に帰ってきて
いないということですね。じゃあ、お子さ
んは？ お子さんはどうしているのでしょ
うか」

夏「希茶ちゃんの中にはいるんじゃない？ 保
育園にも預けていないみたいだし。母親が
仕事に行く時はあの子、いつも置き去りに
されているもの。可哀想よねー、ご飯とか
ちやんと食べさせてもらっているのかしら。
大阪かどこかであった事件みたいにかの中
で餓死でもしていたら迷惑な話よねー。』近
隣の住民は気付かなかったのか』なんて言
われて私たちはバッシングされたりして。
本田さんは隣だし一番風当たり強いわよー」
多恵子「……」

○同・503号室・玄関（夜）

ドアを開け、考え事をしながら帰って
くる多恵子。靴を脱いでポケットから
スマホを取り出す。

『子育てSAFETY』アプリを開き、
『3日間家に置き去り』と打ち込む。
と、動画の女の子が倒れ、天に召され
ていく。

警告音が鳴り『マイナス査定100！
非常に危険な状態！』の文字が現れる。
多恵子「そんなこと、アプリに教えられなく
てもわかるわ！」

多恵子、スマホを投げ捨て家から飛び

出していく。

○同・502号室・前（夜）

多恵子、何度もチャイムを鳴らす。
中から反応はない。

多恵子「……」

多恵子、そつとドアノブを回してみると、鍵がかかっていない。

多恵子「！」

○同・同・玄関（リビング）（夜）

多恵子「お邪魔します……希茶ちゃん、いる？」
多恵子、ドアを開けて恐る恐る中へ入る。

玄関にはたくさんのお洒落な安物の靴が散らばっている。中には見覚えのあるコバルトブルーのハイヒールも。

ドアが閉まり、部屋が一気に暗くなる。

多恵子「希茶ちゃん」

多恵子、目を凝らし奥へと入っていく。床はゴミや脱ぎ散らかされた衣類、化粧品、雑誌などで足の踏み場もない。多恵子、リビングの壁際にあるゴミ山の裾野に、小さな丸い物体が転がっているのに気付く。

多恵子「希茶ちゃん！」

多恵子、薄い煎餅蒲団の上でうずくまって寝ている希茶に駆け寄る。

痩せ細った体に汚れたシャツと紙オムツを身に付けている希茶、つけっ放しとみられるオムツは汚物で異様に膨張している。

多恵子、散乱する空のコンビニ弁当やペットボトルをかき分けて、希茶の隣に座り込む。

希茶、多恵子に気付かないのか、目を閉じたままハアハアと苦しそうに息をしている。

多恵子、恐る恐る希茶の額に手の平をあててみる。

多恵子「まあ！（熱い）どうしましょう……」
オロオロする多恵子。

と、希茶の口からかすかな声が漏れる。

希茶「……ママ？」

多恵子「！」

小さな手が震えながら多恵子に向かって伸びてくる。

希茶「ママ……」

多恵子「……」

多恵子、ガバツと希茶に抱きつく。

多恵子「希茶ちゃん、しっかりするのよ！ ママが助けてあげるから！」

多恵子、希茶を抱えたまま立ち上がる。

ゴミにつまずき、倒れながらも必死に部屋から出ていく。

ブラツクアウト。

○同・503号室・寝室（朝）

ベッドで寝ている希茶。

多恵子の声「おはよう、希茶ちゃん」

希茶、ゆっくり目を開け、声の主を探しキョロキョロする。

見ると、枕元でキティ人形がしゃべっている。

多恵子の声「すぐにお熱が下がって良かったね」

希茶「キティ！」

希茶、目をパチクリさせる。

ドアが開き、多恵子が入ってくる。

多恵子「可愛いでしょ、このお人形。お店で子どもたちに人気だったから買ってきたのよ。キティちゃん、好きでしょ？」

希茶、目を輝かせてコクンと頷く。

多恵子「フッフ、同じ名前だね。良かった、大切にしてくね。お腹すいたでしょう？ ご飯にしましょう」

○同・同・台所（朝）

多恵子、二人分の箸とレンゲを持ってくる。

多恵子「ベランダはもう寒いからお家で食べ
ましようね……」

と声を掛けてみると、希茶、テーブル
に既に並んでいる焼き鮭や卵を手掴み
でガツガツ食べている。

多恵子「まあ、よっぽどお腹がすいていたの
ね……」

希茶、御粥に手を突っ込む。

希茶「熱っ！」

多恵子「ほらほら、手で食べたらダメでしょ。
これを使つて」

多恵子、希茶の手にレンゲを握らせる。
希茶、ぎこちないながらもレンゲを使
つて御粥をすすする。

多恵子「そうそう、上手、上手！
と手を叩いて喜ぶ。」

○同・同・リビング

伸びっ放しの髪の毛が2つに束ねられ、
真新しい服に着替えて、見違えるよう
にキレイになった希茶。

多恵子「良かった、サイズはピッタリね。と
つても可愛いわ！」

希茶、褒められて嬉しそうにはにかむ。

多恵子「じゃあ、今度は爪を切りましょうね。

おばちゃんのお膝にいらつしゃい」

希茶、戸惑いながらも多恵子の膝にち
よこんと座る。

多恵子も嬉し恥ずかしくて微笑む。

多恵子「さあ、手を出して」

多恵子、希茶の黒く汚れた足の爪を切
る。

パチン、パチン、パチン、パチン……
多恵子、ふと智子の言葉を思い出す。

○回想スーパー・出入り口

優奈を抱いた智子。

智子「こうやって子どもを抱くと気持ちいい
わよ。幸せで満たされた気持ちになるんだ
から。それに小さな子どもの場合、まだ言

葉で意思疎通がはかれないから触れること
によって心を通わせることが出来るの」

○元のマンション・503号室・リビング

多恵子、爪切りをやめて腕の中にいる
希茶を後ろからそっと抱き締める。

多恵子 N「本当だ、気持ちいい……心が通っ
ている気がするわ……」

希茶「？」

希茶、不思議そうな顔で振り向く。

多恵子「あ、ごめんなさい。爪を切りましょ
うね……ねえ、希茶ちゃん。ママがいない
時はいつも何をしているの？」

希茶「……」

多恵子「おウチには誰もいないの？」

希茶、小さく頷く。

多恵子「一人じゃ寂しいでしょ？」

希茶「……」

しばらく考え、コクンと頷く。

希茶「……(泣きそうな声で)ママ」

多恵子「希茶ちゃん、ママに会いたい？」

希茶、コクンと頷く。

多恵子「そうよね」

○同・502号室・前(夜)

多恵子、チャイムを押す。

が、反応なし。

希茶、キティ人形を抱いたまま、多恵
子を不安そうに見上げる。

多恵子、ドアを開けて中を覗くが、以
前と同じ状態の真っ暗な室内。

多恵子「まだママ、帰ってきていないようね」

希茶「……(ガックリとうな垂れる)」

多恵子、希茶の目線に合わせてしやが
み込む。

多恵子「大丈夫よ。ママはすぐに帰ってくる
わ」

希茶「……(下を向いたまま)」

多恵子「そうだわ！ ママが帰ってくるまで、
おばちゃんがママになってあげる！」

希茶、顔を上げ、多恵子の顔をまじまじと見る。

多恵子「ママ、じゃなくておばあちゃんかしらね？……ううん、いきなりおばあちゃん嫌だわ。ちよつとだけ年を取ったママだと思ってくれないかしら？」

希茶「……」

多恵子「あ、そうだわ！ 明日、パーティーをしましょう！ 私にこんな可愛い娘ができてたんですもの、お祝いしなくちゃね！」

希茶「？」

○スーパー・全ての売り場

希茶「ブーン！ ブーン！」

多恵子、赤い車の形をした子供用カートに希茶を乗せ、店内を縦横無尽に走り回る。

多恵子「この子供用のカート、一度使ってみたかったの！ 速いぞ、速いぞ、スーパーカー！ 希茶ちゃん、次の角を曲がるわよー！」

希茶、カートのハンドルを夢中で切る。カート、速度を落とさずにカーブする。斜めになる多恵子と希茶。

多恵子「キヤー！」

希茶、キヤツキヤと喜ぶ。

多恵子「あー、怖かったー。フッフフ、さあ、今日は何を買いましたよう？ 食べたいものはありますか？」

希茶、指差す。

希茶「あっち！ あっち！」

多恵子「え？」

希茶の指の先、ショーウインドウの中にカラフルなケーキが並んでいる。

多恵子「まあ、美味しそうなケーキ！ 希茶ちゃんは何が食べたいの？」

希「あれ！ あれも！ あ、あれ！ あれも！ これも！」

希茶、並んでいるパンダやウサギなど動物の顔のデコレーションケーキ全て

丸ごとかぶりついている。
多恵子、大声で叱りつける。

多恵子「ダメでしょ、このまま食べちゃ！ ちゃんとして切ったからフオークで食べないと！ 女の子なんだから、もう少しお行儀よくしてちょうだい！」

希茶「……」

希茶、泣きそうな顔をする。

多恵子「！」

しばらく沈黙。

多恵子「……でも、このまま食べたなら美味しそうね」

多恵子、ケーキを手で大きくちぎって豪快にかぶりついてみる。

多恵子「……美味しい」

多恵子、ケーキをもう一つちぎって、希茶に渡す。

多恵子と希茶、見つめ合いながら同時にケーキを頬張る。

多恵子「美味しいね」

希茶、コクンと頷く。

多恵子「希茶ちゃん、おじいさんみたいよ」
希茶「ブー！」

希茶、多恵子の顔を指差す。

多恵子「え？ 私も？ ママじゃなくてやっぱりおばあちゃんになっちゃった？ 嫌ね」

多恵子と希茶、クリームだらけの顔で大笑いする。

○同・同・寝室

大きな窓から日の光がいっぱい差し込んでいます。

希茶、ベッドの上で膝を抱え、壁際が多恵子をじっと見ている。

多恵子、壁に向かって何か作業をしている。

多恵子「よし、出来たわ。これは何でしょう？」

白い壁には黄色のマスキングテープでキリンが描かれている。

希茶「？」

希茶、首を傾げる。

多恵子「わからないかしら？　これはね、キリンさんよ。首がこんなに長いから高い木の葉っぱも食べることが出来るのよ。すごいわね」

希茶「あれは？」

希茶、キリンの隣を指す。

多恵子「これはね、ウサギさん。耳が長くて走るのがとっても早いよ」

ウサギの他にも壁一面にライオンや象、サル、フラミンゴなどの動物たちが色とりどりのマスキングテープで描かれている。

希茶「あれは？」

多恵子「これはライオン。動物の中で一番強いだよ。どう？　こんなにたくさんの動物たちに囲まれていると楽しいでしょう。動物の名前も覚えていられるし。今日からここは希茶ちゃんのお部屋よ。壁だけじゃなくともっと女の子らしく可愛いお部屋に模様替えしていきましようね」

希茶、嬉しそうに頷く。

希茶「あれは？」

多恵子「これはカバさん。大きな口で『あーん』しているところが希茶ちゃんとそっくり」

希茶「ブー！」

希茶、頬を膨らまして足をバタつかせる。

多恵子「フフフフ、ごめんなさい。希茶ちゃんの名前の通りキティちゃん。子猫に似ているわ。そうね、キティちゃんも貼りましよう！」

嬉々として作業する多恵子をワクワクしながら見つめる希茶。

○同・エントランス

多恵子「よいっしょ、よいっしょ」

多恵子、紙オムツと買い物袋を両手に

ぶら提げて帰ってくる。
後ろから夏が声を掛ける。

夏「本田さん！」

多恵子「！」

多恵子、ギクリとして慌ててオムツを背中に隠す。

夏「お買い物？ 随分たくさん買ったのねー」

多恵子「ええ、まあ。これは、その……」

夏「今日特売日だったものねー、私もいつもの倍買ったもの」

多恵子「ああ、そうでしたね。お買い得でした……」

夏「そうそう、お宅の隣の山崎さんの件だけど、ここしばらく帰ってきていないみたいね。あれからずっとカツンカツン聞いていないもの。ほら、ポストだって郵便物があるにたまつて」

集合ポスト、502号室だけ郵便物があふれている。

夏「子どもの声も聞こえてこないし、私が知らないうちに一緒に出掛けたのかもしれないわね」

多恵子「……」

○同・5階エレベーター前→503号室前

多恵子、ホッとした顔で紙オムツをぶら提げ、エレベーターから降りてくる。と、目の前に世奈が仁王立ちしている。

多恵子「！ こ、こんにちは……」

多恵子、さりげなく紙オムツを隠して世奈の横を通り過ぎようとする。

世奈「待てよ！」

多恵子「！」

立ち止まる多恵子。

世奈、多恵子を睨みつける。

世奈「オバサンさ、一人暮らしでしょ？ 何

で子供用のオムツ持ってんのさ」

多恵子「これは……」

世奈「いるんでしょ、ウチの子。勝手に人の子連れ出してさ、いい歳して自分のやっ

ることわかつてんの？ さっさと返せよ！」

多恵子「……」

世奈「ちよつと聞いてんの？ さっさとウチ

の子を……」

多恵子「返しません」

世奈「はあ？」

多恵子、世奈の方に向き直り、毅然とした態度で話し出す。

多恵子「1週間も、子どもを置いてどこへ行

つていたんですか？」

世奈「オバサンさ、何言ってるの？ あたし

の子どもだよ、あたしが産んだんだ、どう

しようとおあたしの勝手だろ！」

多恵子「あなたは産んだだけです」

世奈「はあ？」

多恵子「子どもは社会の宝物です。希茶ちゃん
んが元気で暮らせるように私も見守る義務
があります」

世奈「赤の他人が人の家庭に口出しすんじや

ねーよ！ さあ、早く希茶を返せ！ 返せ

よ！」

多恵子「そんなに会いたいですか？ そんな

なに大切な子どもを残して、あなたは一体

どこへ行っていたんですか？」

世奈「子どももいないくせに、えらそうなこ
と言ってるじゃねーよ！……あたしの男が
家の金を盗んで消えたんだよ！ 探しても
探しても見つからねーんだ！ 一生懸命貯
めた金だったのに！ こうなったら子ども
どころじゃねーだろ、普通。子どもなんて
忘れちまうよ！」

多恵子、世奈を冷静な表情で見つめる。

多恵子「それなら、いっそのまま忘れて下

さい」

世奈「はあ？」

多恵子「子どもに食べ物、着る物、安心して
寝る場所を用意出来ないのであれば、子ど
もが不幸になります。今すぐ親であること
を忘れて下さい」

世奈「はあ？ 何だと？」

多恵子「子どもを放置するならば、母親の資格も放棄すべきです。代わりに私が希茶ちゃんの母親になります」

世奈「ババア、ふざけんな！」

世奈、拳で多恵子の顔を殴る。

多恵子、吹っ飛んで床に倒れ込む。

が、すぐに顔を上げて世奈をキツと睨みつける。

世奈「な、何だよ」

世奈がたじろいだ瞬間、多恵子、素早く脱げた靴と荷物を拾い集め、家へ向かって走り出す。

世奈「おいコラ、待て！ 逃げんな！」

世奈、追い掛けて行き、鍵を開けている多恵子の肩を掴むが、多恵子、その手を払いのけ、急いで部屋の中へ逃げ込む。

鍵をかける音。

世奈、ドアをガンガンと蹴って叫ぶ。

世奈「ババア！ ふざけんな！ 警察呼ぶからな！」

○同・503号室・玄関／廊下

暗い玄関。

閉めたドアの前に立つ多恵子、ハアハアと息が上がっている。

多恵子、深呼吸して息を整え、沈んだ表情のままゆっくりと暗い廊下を歩いていく。

多恵子、寝室の前で立ち止まり、服装の乱れを直すとドアを開ける。
中から暖かな光が差し込む。

○同・同・寝室
多恵子「！」

多恵子、まぶしさに思わず目を細める。
光で溢れる明るい室内はミントグリーンのベッドカバーにピンクのカーペット、壁にはキティちゃんや動物たちが描かれ、カラフルな子ども部屋に模様

替えられている。

ベッドの上、たくさんのぬいぐるみの中にちよこんと座った希茶がキティ人形を抱いてこちらを見ている。

希茶「……(不安そうに)」

多恵子「ただいま。大丈夫よ、心配しなくて。

希茶ちゃんの大好きなドーナツを買ってきたからおやつにしましょう」

○同・同・ベランダ

テーブルに並べられたドーナツと希茶用のミルク。

多恵子、紅茶を淹れながら、

多恵子「今日は暖かいから久しぶりに外で頂きましょう。希茶ちゃんと初めて会ったのはこのベランダだったわね。あの時は驚いたわ、あんな小さな隙間から顔が覗いているなんて思いもしないから……」

多恵子、ふと希茶のほうを見ると、大きな口を開けてドーナツに齧り付いている。

希茶、夢中で食べているうち、多恵子がじつと見ていることに気付き、食べるのをやめる。

多恵子、優しく微笑む。

多恵子「また挨拶するのを忘れちゃったわね。大丈夫よ、気にせず食べなさい。慌てなくともいつかきつと出来るようになるわ。食べる時は『いただきます』、食べ終わったら『ごちそうさま』。そして誰かに会った時は『こんにちは』、別れる時は……」

ピンポンとチャイムの音。

多恵子の顔から笑みが消える。

多恵子「『さようなら』、希茶ちゃん」

○同・同・玄関

多恵子、ドアを開ける。

と、警察官の久保田守(45)と世奈が立っている。

世奈「てめ！」

世奈、久保田を押しつけ、多恵子に襲いかかろうとする。

久保田「ちよっとお母さん、やめなさい！

（多恵子に）すみません、この方が子どもが誘拐されたとおっしゃいました」

世奈「このババア、マジでうちの子誘拐したんだ！ さっさと捕まえてよ！」

久保田「失礼ですが、本当かどうか、お家の中を確認させて頂いてもよろしいですか？」

世奈「いるに決まっていますだろ！ 希茶！ 希茶！ ママだよ、希茶——！」

と、寝室のドアがゆっくりと開き、中から希茶が出てくる。

多恵子「希茶ちゃん……」
多恵子、祈るような目で希茶を見つめる。

希茶、多恵子を見る。

希茶「……（不安そうに）」
世奈「希茶！」

希茶、多恵子の奥に世奈を見た瞬間、泣き顔になる。

希茶「ママ——！」
多恵子「！」

希茶、走り出し、多恵子の横を素通りして世奈の胸の中へ飛び込む。

世奈「希茶！ 会いたかった！」
希茶「ママ——！」

強く抱き合う世奈と希茶。

久保田、呆然としている多恵子に言う。
久保田「署までご同行頂けますか？」

○警察署・廊下（3日後）

T 3日後

長い廊下を久保田に連れられ、俯いて歩く多恵子。

夏の声「やっぱ寂しかったんじゃないの？
結婚もしてないし、子どももないし」

由美の声「キャリアウーマンのなれの果てね。
社会でどれだけ活躍したって、所詮女は家庭を持たないと負け犬よ。惨めよね」

○警察署・前

秋晴れの空の下、久保田に付き添われ、
玄関から出てくる多恵子。
多恵子、高い空を見上げる。

多恵子「……」

久保田「お気をつけて」

多恵子「お世話になりました」

多恵子、久保田に深々と頭を下げ、ゆ
っくりと歩き出す。

○マンション・エントランス

夏と由美が立ち話をしている。

夏「そう言えば、あの人が希茶ちゃんのこと
を聞いてきた時、何かおかしいと思ったの
よ」

由美「やっぱり？ 私も何か変なことを考え
ているんじゃないかって感じたの。怖いわ、
ひよつとしてウチの孫も狙われていたんじ
やないかしら？」

夏「ウチの孫も！ 最近よく遊びにきていた
し危なかったわー！ 全く犯罪者がこんな
身近にいるとはね。世の中何があるかわか
らないから心配だわ！」

いつの間にか多恵子、二人の後ろに立
っている。

多恵子「ただいま」

夏「あ、本田さん！ し、心配していたのよ。

警察に連れて行かれたから。もう帰ってき
てもいいの？」

多恵子「ええ。3ヵ月検診で希茶ちゃんの栄
養不足を心配していた保健師の方がいて、
希茶ちゃんの健康状態が驚くほど改善して
いると警察に話して下さったんです。それ
で私が希茶ちゃんを心配して預かっていた
だけだということが信用してもらえました」

夏「そうだったの、私たちもそうじゃないか
と思っていたのよ、ね！」

由美「そうよ、本田さんが誘拐するなんて信
じられないもの。大変でしたねー」

多恵子「ご心配をお掛けしました。では失礼します」

多恵子、二人に頭を下げると、暗証番号を押し、自動ドアを開けて中へと入る。

夏「自動ドアが閉まると夏、声をひそめて、夏「ということは、まだここに住み続けるっ
ていうこと？」

由美「そういうことよ！」

エレベーターに乗り込んだ多恵子、笑顔で会釈する。

夏と由美も手を振って笑顔で見送る。が、エレベーターの扉が閉まると同時に騒ぎ出す。

由美「大変！誘拐犯と同じマンションだなんて！」

夏「引越したいわ！全く迷惑な話だわ！」

○同・503号室・玄関／廊下（夕）

多恵子、鍵を開けて入ってくる。

多恵子「ただいま……」

応える者はいない。静まり返った部屋。多恵子、疲れた顔で暗い廊下をトボトボと進み、寝室の前で立ち止まる。一呼吸置いてドアを開く。

○同・同・寝室（夕）

薄暗い室内。

多恵子、入ってきて部屋中を見渡す。子供用に模様替えした室内は壁に貼った動物たちのマスクングテープが所々剥がれ落ち、床にぬいぐるみが散らばっているなど荒廃感が漂う。

多恵子、マスクングテープが剥がれかけているキティちゃんの顔を寂しそうに手で触れる。

多恵子「……」

○同・同・ベランダ（夕）

多恵子、部屋から出てきて隣の502

号室との仕切り壁の隙間をじっと見つめる。

誰もいない。

多恵子、手すりから身を乗り出し、隣の家を覗いてみる。
カーテンも外され、伽藍堂の室内が見える。

由美の声「そうそう、大変と言えば、昨日引越して行った、あの親子」

○同・エントランス(夕)

立ち話を続けている夏と由美。

夏「山崎さんでしょ。結局希茶ちゃんはどうなるの？ 施設に入るの？」

由美「それがさっき大家さんから聞いた話なんだけどね……」

○同・503号室・ベランダ(夕)

由美の声「母親には育児能力がないと判断されて、希茶ちゃんには祖父母に引き取られることになったみたいよ。最初からそうすれば良かったのよ」

多恵子、椅子に座って遠くをぼんやり見ている。

多恵子「……」

○同・同・寝室(朝)

朝の光が差し込む中、多恵子、壁に貼ってあったマスキングテープを次々に剥がしていく。
剥がしたテープ、ぬいぐるみ、子供服はゴミ袋へと放り込む。
無表情で淡々と作業する多恵子。
カラフルだった部屋がどんどん殺風景な空間へ戻っていく。

○マンション前のゴミステーション(朝)

多恵子、ゴミを捨てに行く、大家の山根次郎(72)がブツブツ言いながら、ゴミを捨てようとしている。

山根「全くもう、何でこんなことを……」
多恵子「大家さん、おはようございます」

山根「ああ、えっとお宅は……」

多恵子「503号室の本田です」

山根「ああ、本田さん」

多恵子「どうかされましたか？」

山根「お宅の隣の親子、家賃を滞納した上、ゴミも出さないで出て行ったんだ。中に入ったらゴミの山さ！これで5階を3往復もしているのに、まだこんなゴミがごまんとある！」

多恵子「両手の大きなゴミ袋を掲げてみせる。それはお気の毒に……」

多恵子「山根の持つゴミ袋に目が止まる。中にキティ人形が透けて見える。」

多恵子「そ、それ！」

山根「ん？何だ？」

多恵子「そのゴミ、ちよつと見せて下さい！」
山根「え？まあいいけど……」

多恵子、山根からゴミ袋を受け取ると、中からキティ人形を取り出す。

山根「その人形が何か？」

多恵子「あの、えつと……この人形つて中に乾電池が入っているんですよ！このまま捨てたらいけないと思って」

山根「へえー、気付かなかった」

多恵子「これ、私が分別しておきますね」

山根「そうしてくれると助かるよ、悪いね」

多恵子「いえ……」

○同・エレベーター・中（朝）

多恵子、キティ人形の顔をじつと見つめた後、ギュッと強く抱き締める。

多恵子「……」

○同・5階エレベーター前／廊下（朝）

多恵子が降りてきて、静かに家へと向かう。キティ人形と手を繋ぎながら。多恵子、キティ人形を見てつぶやく。

多恵子「希茶ちゃん、お帰りなさい……」

○同・503号室・ベランダ(夕)

オレンジ色の空に薄墨色の細長い雲が筋状に浮かぶ。隣の公園に人影はなく、滑り台だけが夕日を受けてオレンジ色に光っている。椅子に座ってぼんやりと公園を見ている多恵子。

多恵子の前のテーブルにはキティ人形が置かれ、人形の前には希茶が好きだったドーナツとミルクが並ぶ。

多恵子「ねえ、希茶ちゃん、ここから見える景色
とつぶやくと、スマホを取り出し、『子育てS A T E I』を開く。

『女の子』『4歳』にチエックした上、『ネグレクトする母親 でも母親が好き』と打ち込み、完了ボタンを押す。が、動画の女の子は変身せずに女の子のまま。

多恵子「？」

女の子「査定0。ごく普通。どんなママでも子どもはママが大好きなんだもん！」

多恵子「……」

多恵子、力なくスマホをテーブルに置く。その際、多恵子の手がキティ人形に触れてしまう。

多恵子「あ！」

床に転がり落ちるキティ人形。

多恵子、拾おうと立ち上がった瞬間、突然キティ人形がしゃべり出す。

キティ人形「いたります、ごちそーさま」

それはまさしく希茶の声。

多恵子「！」

キティ人形「こんにちは、さよーなら、ありがとう、いたります、ごちそーさま、こんにちは、さよーなら、ありがとう……」
多恵子、その場で立ち尽くしたまま、しゃべり続けるキティ人形を見つめ続ける。

○回想くマンション・503号室・寝室

ベッドの上に座り、キティ人形を相手に一生懸命挨拶の練習をしている希茶。希茶「いたらきます、ごちそーさま、こんにちは、さよーなら、ありがとう……」

○元のマンション・503号室・ベランダ(夕)
キティ人形「いたらきます、ごちそーさま、こんにちは、さよーなら、ありがとう……」

多恵子「希茶ちゃん……」

多恵子、キティ人形を拾い上げ、強く抱き締めて号泣する。

多恵子「うわわわあーん！」

まだ照明がつかない薄暗いマンションに多恵子の嘆き声が響き渡る。いつまでも泣き続ける多恵子。ホワイトアウト。

○旭野小学校・1階の給食室(2年半後)
T 2年半後の春

明るいフロア。あちらこちらで白い湯気が立ち上り、調理する音が響く。白衣を着た女性スタッフ5、6人がそれぞれを持ち場で調理に専念している。大きな鍋でジャガイモを洗うスタッフ。油に浮かぶキツネ色をした大量のトンカツを次々と揚げていくスタッフ。それらの作業状況をチェックして回る一人の女性がいる。多恵子だ。多恵子、スタッフたちにテキパキと指示を与えていく。

多恵子「人参は繊維に沿って切って下さいね。歯触りがとても良くなって甘味が出て美味しくなりますから」

スタッフ①「はい！」

多恵子「あ、そのお肉は臭みを取るために予

めお酒につけておきましたよね？」

スタッフ②「はい、つけておきました！」

多恵子「玉葱は飴色になるまでしつかりと炒めて下さいね」
スタッフ③「はい！」

スタッフたち、笑顔で多恵子の指示に従う。
智子の声「60過ぎてよく調理師になろうなんて思ったわね！」

○喫茶店

多恵子「2年間勤めてようやく免許がもらえたのよ。今は調理チーフとして献立を決めたり、調理法を指導したりしているの」

と嬉しそうに話す多恵子。
向かい側で智子が感心して頷く。

智子「へえー、週5日も全校児童の給食を作るんでしょ？ 大変じゃない？ 私なんて主人と二人分の食事を作るのでさえ嫌気がさしているのに。眠たくても朝起きてご飯作って、すぐに昼ご飯。少ししたら買い物に行ってまた晩ご飯の支度。一日中食事に振り回されている感じで、もううんざり！」

多恵子「フッフ、私はずっと独り身だったから、うんざりするほど人のために食事を作ったことがないからじゃないかしら？ 調理師になつて子どもたちのために料理をするのが楽しくて仕方ないの」

智子「へえー」

智子、目をパチクリさせる。

多恵子「私、還暦を過ぎてようやく夢を叶えた気がするわ」

○回想く川原の土手(約40年前)

並んで歩く高校生の智子と多恵子。

智子「多恵子の夢は？」

多恵子「私？ 私は：：毎日もたちが喜ぶ美味しいご飯を作ることかな」

智子「何それ？ へいぼーん！」
恥ずかしそうに微笑む多恵子。

○元の旭野小学校・給食室前の廊下

私服に着替えたスタッフたちがぞろぞろと給食室から出てくる。その中に多恵子の姿も。

多恵子「お疲れさまー」

多恵子、他のスタッフとは逆方向へ行く。

スタッフ①「あれ？ チーフは帰らないんですか？」

多恵子「うん。ちょっとだけ子どもたちが食べている様子を見ていこうかなと思って」

スタッフ②「今日もですか？ チーフは本当に子どもがお好きなんですネ」

多恵子「私には子どもがいないし、昔は苦手だったんだけどね。今は可愛くて可愛くて。

子どもたちが食べている姿を見ると『明日も美味しい給食を作るぞ！』っていう力が沸いてくるの」

スタッフ③「ウッフ、何だかチーフ、お母さんみたい！ じゃあ、私たちはこれで。

お先に失礼します」

多恵子「お疲れ様」

スタッフ①②③、帰っていく。

○同・階段

多恵子「よいっしょ、よいっしょ」*

多恵子、フッフウ言いながら3階まで上っていく。息は上がっているが、上気した顔は生き生きしている。

○同・3階の空き教室

ガラリと戸が開いて、多恵子が入ってくる。

多恵子、手慣れた様子で、壁際に積み上げられた机と椅子の中から椅子を1脚、持ち出して窓際に置き、窓を開けて椅子に腰掛ける。

多恵子「よいっしょと！」

窓の外、青空の下で向かいの校舎の1階テラスに100人くらいの子どもたちが集まって賑やかに給食のカツカレ

―を食べている。
多恵子、パクパク食べる子どもたちを
嬉しそうに眺める。

多恵子「……」

と、ガラリと戸が開き、がっしりとした
体格にかついで顔をした校長、澤田
敏明(57)が現れる。

多恵子「誰だ！」

多恵子、驚いて立ち上がる。

澤田「本田さん！」

多恵子「校長先生、すみません。勝手に……」

澤田、急に優しい顔になる。

澤田「いいですよ、ここは空き教室で使って
いませんか。でも、ここで何をされてい
るんですか？」

多恵子「給食を食べる子どもたちを見ていた
んです。ここからはテラスがよく見えるの
で」

澤田、窓際へやってきて多恵子の隣で
窓の外を覗く。

澤田「おお、本当だ！　ここからだによく見
えますね」

多恵子「はい。私、この光景が大好きなんで
す。子どもたちが食べている光景って幸せ
そのものだと思いますか？　見ているだ
けで私も幸せな気持ちになるんです」

澤田「本当にそうですね、幸せな光景だ……
反対にテレビなどで飢えた子どもを見ると、
胸が締め付けられる思いがしますね。そん
な世の中を作っている大人の一人として、
自分が情けなくなるというか……」

多恵子「……」

澤田「あ！　鈴木、もうお代わりしている！
全くあいつはよく食べるな」

澤田、笑いながら多恵子のほうを向く。

澤田「この広いテラスは旭野小の自慢の1つ
なんです。風と光を感じながら食事をする
と味が違いますでしょう？　だから晴れた
日の給食は全校生徒がテラスに集まって食
べることにしているんです。ま、本田さん

の作る給食はどこで食べても美味しいですけどね」

多恵子「まあ、恐れ入ります」

澤田「いやー、本田さんの給食は本当に好評なんですよ。実は我々職員の間で密かに本田さんのことを『食育イーン』って呼んでいるんですが、ご存知ですか？」

多恵子「『食育イーン』？」

澤田「『食育』と『クイーン』を組み合わせて『食育イーン』、つまり食育の女王様」

多恵子「まあ、女王様だなんて、こんなおぼあさんに。もったいないですわ。私はただ給食を作っているだけで大したことはしておりません」

澤田「いえ、大したことですよ！ 食の力はすごいです！ 本田さんのお陰で子どもたちの好き嫌いがなくなっただけで残飯が減ったり、朝礼や運動中に倒れる子がいなくなったり、我々職員も驚いているんです。ま、子どもが家庭の料理より給食のほうが美味しいと言っているという父兄の方もおられました」

多恵子「まあ」

澤田「澤田と多恵子、声を立てて笑う。」

澤田「本当に食の力はすごい。私はあと3年で還暦ですが、未だに死んだお袋が作ってくれた海苔巻きが無性に食べたくなる時があるんです。甘い乾瓢と玉子が入ったお袋の海苔巻き。美味かったなあ：：あれを食べると、どんなつらい時も元気になるました。子どもの頃に食べた味は一生忘れないものですね」

多恵子「：：」

澤田「あと2週間もすれば、新1年生がやってきますので、引き続き美味しく元気になれる給食をお願いしますね。今や『食育イーン』の作る給食も旭野小の自慢の1つなんですから」

多恵子「かしこまりました」

澤田「では私はこれから会議があるので。子

どもたちの幸せな光景、ゆつくりとご堪能下さい」

多恵子「ありがとうございます」

澤田「失礼します」

多恵子N「出ていく澤田を笑顔で見送る多恵子。は決して偶然ではない」

○山根家・玄関（2年半前）

キティ人形を持った多恵子が山根を訪ねる。

多恵子「このお人形、山崎さんのお嬢さんかとても気に入っていたものなんです。まだキレイだし、本当に捨てていいものなのか聞いてみたいのですが」

山根「聞くとしたら母親だよ。あの人、私が電話しても、家賃の取り立てだと思っただけ。ちっとも出ないんだよ。子どもがいる祖母の家は旭野小学校のすぐ前だってことは知っているんだけど、そこに母親も一緒に住んでいるかどうかはわからないな」

多恵子「旭野小……」

山根「ここからちよつと離れているから人形のためにわざわざ行くこともないだろう」

多恵子「そうですね、ありがとうございます」
残念そうな顔をしながらも、多恵子の唇の端がわずかに微笑む。

○イメージ旭野小学校・校門前

桜吹雪の中、真新しいランドセルを背負い、期待に胸を膨らませた新1年生たちが登校してくる。

その中に希茶の姿も。

多恵子N「もうすぐここへ、1年生になった希茶ちゃんが入学してくる」

○イメージ同・1階のテラス

給食を食べる新1年生たち。
友達に囲まれて楽しそうな希茶、大きな口を開けて給食を食べる。

多恵子 N「きつと希茶ちゃんもあのテラスで
『あーん』と大きな口を開けて私の作った
給食を食べるのだろう」
希茶、食べているうち、何かを思い出
してハッとす。
希茶、見上げると、散り始めた白い桜
の花と差し込む光の間に向かいの校舎
の3階から、こちらを見つめる人影が
かすかに見える。
多恵子 N「その時、思い出してくれるだろう
か、あの日のベランダの味を」

完